

連載コラム



みずき野と
その周辺の
植物と昆虫



第28回

こうよう こうよう
紅葉 ・ 黄葉



もとよし ふさ お
本吉 總男

2016年11月

晩秋から初冬にかけて、自然は樹木の紅葉(こうよう)や黄葉(こうよう)で彩られます。モミジの紅葉やイチョウの黄葉は最も華やかなものですが、これらの樹木のほかにも、多くの落葉樹で紅葉や黄葉を見ることができます。常緑樹の中にも葉の紅葉や黄葉が見られるものがあります。しかし常緑樹は、落葉樹のようにすべての葉が一斉に色づくことはないので、あまり目立ちません。

落葉樹の場合、秋も深まると、寒さによって葉は老化し、光合成によって澱粉^{でんぷん}を作る能力がなくなるため、植物にとって不要になります。光合成のために必要だった緑の色素、葉緑素は分解して失われていきます。葉の根元には離層^{りそう}という組織(特殊な細胞からなり、細胞どうしの接着を弱めて、枝から葉を切り離すための層)が作られ、枝から葉への水分の供給や葉から枝への養分の供給が妨げられます。そして、秋の低温が刺激となって、葉の中で紅い色素アントシアン^{あか}が合成され、蓄積されます。これが「紅葉」です。また、葉が老化してもカロチノイドという黄色い色素は残存しており、アントシアンを合成する能力のない葉は、葉緑素が失われた後、カロチノイドにより黄色になります。このようにして黄色に色づいた葉を「黄葉」と呼びます。

なお、一口に紅葉といっても、色合いや色づき方は種により異なります。また同じ種の中でも、株によって異なり、また葉の位置によっても異なります。色調の違いは、アントシアン、カロチノイドおよび分解しきれなくて残存する葉緑素の割合や葉内のpH、日の当たる位置など、多くの要因によります。

今回は、主としてみずき野周辺の紅葉または黄葉する落葉樹について紹介します。

(1) モミジ

最も鮮やかな紅葉は、やはりカエデの仲間、特にモミジです。みずき野の中では、さくらの杜公園やどんぐり公園で、特に美しいモミジの紅葉が見られます。公園樹とし



イロハモミジ 11月下旬 さくらの杜公園

て使われるモミジにはイロハモミジ(タカオカエデ)やオオモミジ、オオモミジの変種ヤマモミジがあります。みずき野の公園に植えられているものの多くはイロハモミジのようです。



イロハモミジの葉 11月中旬 どんぐり公園

(2) ウルシの仲間

ウルシの仲間(ウルシ、ヤマウルシ、ツタウルシ、ハゼ、ヤマハゼ、ヌルデなど)は、いずれも鮮やかに紅葉する樹木として知られています。ヤマハゼはさくらの杜公園の周辺にかなり自生しており、10月下旬頃から紅葉が楽しめます。

ウルシの仲間の葉は複葉です。植物の葉には単葉と複葉があり、サクラ、ウメ、カキ、カエデなどのように、多くの植物の葉は単葉です。一方、複数の小葉しょうように分かれた葉を複葉といい、ネムノキ、サンショウ、バラなどの葉は複葉です。

右下の写真で示したヤマハゼには1本の枝に11枚の葉がついているように見えますが、全体が1枚の葉で、11枚の葉状のものは小葉しょうようです。小葉の数は葉によって異なり、通常7枚ないし13枚で

す。ヤマハゼの葉は赤または橙赤色とうせきしよくに色づき、たいへん美しいものです。ハゼやヤマハゼは紅葉すると、葉は小葉しょうようをつけたまま枝から離れて落下します。小葉しょうようもまた葉から離れやすく、晩秋の風に吹かれて飛んでいきます。



ヤマハゼの複葉 10月下旬 8丁目東隣接地



サトウハチロー作詞/中田喜直作曲

「小さい秋みつけた」の3番の歌詞

誰かさんが 誰かさんが 誰かさんが みつけた
 ちいさい秋 ちいさい秋 ちいさい秋 みつけた
 昔の昔の 風見の鳥の ぼやけたとさかに
 はぜの葉ひとつ はぜの葉あか^{いり}くて 入^{ひいろ}日色
 ちいさい秋 ちいさい秋 ちいさい秋 みつけた



実際には見たことはありませんが、思い出の中にあるような晩秋の情景です。

みずき野周辺では、ヤマハゼの紅葉が見られます。ヌルデも地方によっては、美しく紅葉する植物ですが、みずき野周辺のヌルデの葉は、たいてい紅葉せずに枯れてしまうようです。たまに紅葉する葉も見かけますが、あまり美しくはありません。



ヤマハゼ 11月中旬 8丁目東隣接地



ヌルデ 11月中旬 8丁目東隣接地

(3) ドウダンツツジ

ツツジの仲間にも紅葉するものがあります。わけても目を引くのはドウダンツツジです。春に咲く釣鐘状の白い花が可憐な植物ですが、初冬には葉が真っ赤に染まり、その美しさは格別です。



ドウダンツツジ 11月下旬 さくらんぼ公園バス停付近

(4) ニシキギ

ニシキギやコマユミも紅葉する植物としてはずすことはできません。特にニシキギの美しさは「錦木」という名にも表れています。

にしきぎ もみじ
袖ふれて 錦木紅葉 こぼれけり 富安風生

ニシキギは落葉性の低木で、北海道から九州まで分布する在来種です。ニシキギの枝には^{よく}翼という板状の組織がついています。コマユミはニシキギとよく似ていますが、^{よく}翼がありません。



ニシキギ 11月中旬 さくらの杜公園



ニシキギの茎についている
^{よく}翼と呼ばれる板状の組織

(5) ハナミズキ

みずき野のシンボルともいえるハナミズキは、北アメリカ原産の植物です。花が美しく、春には白や薄紅色の花がみずき野町内のいたるところで見られます。ハナミズキは花だけでなく、秋の紅葉も美しい樹木です。



ハナミズキ 10下旬 さくらの杜公園

(6) ケヤキ

ケヤキは紅葉の美しい高木です。みずき野の「けやき通り」のケヤキの葉はそのままかっしょく褐色になって枯れてしまうことが多いのですが、たまに美しく色づく年もあります。



けやき通り 11月中旬 6丁目付近

(7) モミジバフウ (アメリカフウ)

モミジバフウ 11月中旬 守谷市役所駐車場

モミジバフウ(アメリカフウ)も紅葉が美しい大木で、北米からメキシコに原産するマンサクの仲間です。みずき野周辺にはありませんが、守谷市役所の駐車場には何本かのモミジバフウが植えられており、初冬には紅葉がよく目立ちます。

(8) メタセコイア

メタセコイアは中国原産の植物で落葉する針葉樹です。みずき野では中央公園とさくらの杜公園で見ることができます。落葉前の葉はたいたいいろ 橙色からせきかっしょく 赤褐色になります。



メタセコイア 11月下旬 中央公園

メタセコイアの葉
11月中旬中央公園

(9) イチョウ

イチョウは黄葉する植物の中ではもっとも目立つ樹木でしょう。「いちょう通り」の街路樹として、みずき野でも馴染み深い樹木です。残念ながら、あまり身近で見られるせいか、完全に黄葉したイチョウの写真を撮っていませんでした。写真は「いちょう通り」の黄葉しつつあるイチョウ並木です。



いちょう通り 11月中旬

イチョウは中国原産の植物で日本にはいつ入れたのか定かではありませんが、北村四郎によれば、室町時代に一条兼良いちじょうかねらによって著されたとされる『尺素往来』せきそおうらいには当時栽培されていた植物のリストの中にイチョウも入っており、この時代にはイチョウが伝来していたことは明らかであると述べられています(『北村四郎選集3』 保育社)。

夏目漱石の『こころ』の中に、「私」と「先生」が雑司が谷墓地のはずれの茶屋で偶然に出会い、墓地を散策する場面で、次のような記述があります。

「墓地の区切り目に、大きな銀杏いちょうが一本空を隠すように立っていた。その下へ来た時、先生は高い梢こずえを見上げて、『もう少しすると、綺麗きれいですよ。この木がすっかり黄葉して、ここいらの地面は金色の落葉で埋まるようになります』といった。先生は月に一度ずつ必ずこの木の下を通るのだった。」

「先生」は自殺した友人の墓を訪れるために、毎月ここに通うのですが、イチョウの黄葉に託して、その美しさとともに、寂しさ、自らの悔恨を表現しているように思います。

(10) クヌギ

クヌギは本州、四国、九州に分布し、関東平野には特に多い樹木です。コナラとともに雑木林を構成する主要な樹木で、関東平野に特有な景観を与えています。かつて、武蔵野はクヌギやコナラを主体とする雑木林が点在し、子どもの頃は、どんぐり拾いが好きでした。クヌギのどんぐりは、「おかめどんぐり」と呼ばれ、丸くて大きくて、「どんぐり独楽」を作るのに最適でした。



クヌギ 11月中旬 中央公園

クヌギは古代からよく知られた植物で、「くぬぎ」のほか「つるばみ」とも呼ばれ、そのどんぐりやどんぐりの^{かさ}毬は衣服の染料に使われました。

また現在は、クヌギは木材や薪・炭の材料として使われ、そのために栽培もされています。

クヌギは、ケヤキのように姿の優れた樹木ではなく、むしろ無骨な姿ですが、黄葉の季節には一瞬の輝きを見せます。詩人はクヌギにどのようなイメージをもつでしょうか。ここでは西脇順三郎の詩の一部を引用しておきます。

西脇順三郎の詩集『旅人かへらず』より

むさし野に秋が来ると
 雑木林は恋人の幽霊の音がする
 くぬぎ 櫟 がふしくれだつた枝をまげて
 淋しい
 古さびた黄金に色づき
 あの大きなギザギザのある
 長い葉がかさかさ音を出す

西脇は『旅人かへらず』のはしがきの中で、自分の中に「通常の理知や情念では解決で出来ない割り切れない自分がある。これを自分は『幻影の人』と呼びまた永劫の旅人とも考える。この『幻影の人』は自分のある瞬間に来てまた去って行く。この人間は『原始人』以前の人間の奇跡的に残っている追憶であろう。」「道端に結ぶ草の実に無限な思い出のごときものを感じさせるものは、自分の中にひそむこの『幻影の人』のしわざと思われる。」と述べております。

クヌギは日本の風土に土着して、古代の姿を引き継いできた樹木です。西脇の言葉にある「幻影の人」は、晩秋のクヌギの姿に「無限な思い出のごときもの」を感じたのではないのでしょうか。